

---

# クロムコア -三 千 世 界-

黒沢 怜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クロムコア - 三千世界 -

### 【Nコード】

N4192E

### 【作者名】

黒沢 怜

### 【あらすじ】

時は2050年、伊豆、夏 月城神社の17歳の巫女、月城万希は、50年に一度の水神祭の夜、数奇な宿命を呼び醒ましてしまう。千年の時空の彼方から漂流してきた日向焰<sup>エン</sup>は、稀代の陰陽師である父と、かつての天界の守護神であり魔界の統治者に君臨する母を持つ。奇妙な出会いと碧い水晶がやがてとんでもない場所へ二人を導く。それぞれの宿命に目覚めたとき、二人の決断は 時渡る石がつかなく千年の絆。 2008/6月初旬start シリアスです。恋愛観も含めてストーリーはそこそこ大人向け

## Overture (前書き)

○ 読者のみなさまへ ○

・長編ですが完結予定です！更新は随時していきますので、気に入ってくれた方お付き合いくださると嬉しいです また、辛口な意見もありがたく頂きます。宜しくお願いします

作品には多少暴力的な表現、性的な表現があります。あらかじめご了承ください。

## O v e r t u r e

・ ・

全ては必然のものとして、起こったのだろうか。

ならば、私が望んだとでも？

もし通り過ぎていたとしたら

無は、とても安らかであつたろうに。

・ ・

# Overture (後書き)

随時更新中

## 第一章 “潮風” (1)

また、同じ夢を見ている。

薄紅色の空には幾千億の星がまたたき、絶えず流星が降っている。

眼下に広がる一面の純白は、枯れることのない永遠の花園。

遠く、天高くそびえる岩山のはるか上方から、突き抜けるような  
あの音は

永久の憂鬱のなかでただひとつ、時があるのを教えるもの。

1

潮風。

四階の窓辺の最後尾で、月城万希は、隣人のいびきにより眠りの  
淵から呼び戻された。

「こら又倉！四度目の罰則はプール掃除」

弾けた音がして、教室にどっと笑いがあふれた。

「いつ…てー…」

振り向くと、幼なじみが逆立った灰髪の頭を抱えている。居眠り常習犯を目覚めさせた中年教師は、よれた日本史の教科書を主の上にかぶせた。表紙にでんと描かれた落書きがまさか自分の似顔絵とは気付かない。それより数倍まともな容姿をもつ眼鏡の担任は、意気揚々と教壇へ戻っていった。

「今すぐプールへ赴任したいね」

こちらも盛大なお絵かき帳と化した下敷きで風を起こしながら、第二ボタンまでを開け放った少年はすでに眠る体勢である。

呆れて笑いつつ、少女の瞳もまた閉ざされた。

21世紀も半ばの、初夏の午後である。

港を裾野に抱いたなだらかな山峰は深い緑をたたえて、古い港町には盆の季節が訪れようとしていた。

課外授業の帰路である。

海風が強く、おんぼろ自転車はなかなか進まない。その発するキシャー、キシャー、という断末魔に、道行く人はみな一瞥投げるが、耳になじみすぎた二人のオーナーは気にもとめない。

「1839年、江戸幕府が企てた言論弾圧事件について述べなさい」



先程の教科書片手に、後部座席の少女は、光の透ける薄茶のシートカットを淡く輝かせている。

「幕府の攘夷策を責めた慎機論の著者・渡辺華山と、彼の属す尚齒会の会員・高野長英らが圧せられたもの。蛮社の獄。蛮社とは「蛮学社中」の略」

暑さにだらけきった顔で、運転手はぐだぐだと解答した。

「もうやめてくれ。疲れた」

三時間の集中講義のうち、実に八割を夢の国で費やした睡眠すこやかなる優等生を、なんとか出し抜きたい万希である。眉間にしわを寄せ、難問を練っていると、カンペは没収された。

「あつ！返しなさいよ」

「これ俺のなんだけど」

少年はしらと言った。

「てか、なんか汗くさい」

「客が重いんだよ」

たわいないやり取りは延々と続いて、自転車は一路、海岸線をなぞる。

月城万希は美形だが、心持ちきつい。意志の強そうな大きい瞳、すっと通る鼻梁、口角が上がった唇。とにかくメディアばえしそうな美少女だ。

それに比べ、彼女の幼なじみは美の質が一風変わっている。

サクラタカミ

叉倉高巳。

どこをあさっても純日本人しか出てこない家系で、唯一アッシュ・グレーの瞳を生まれ持った彼は、髪も同色に染め、自然と人としての調和をはかっている。一重目蓋だが幅があり、切れ長の美しい流線が色気すら感じさせる。

近所に生まれ育った二人は、幼稚園二年、小学校六年、中学校三年、高校一年、プラス現在進行形で驚異の腐れ縁を更新しており、万希に言わせれば「不吉な何かがはたらいている」ということになる。

山裾の鳥居の前に乗客を下ろすと、自転車は命果てたようにぐしやんと倒れ、後輪をからからと宙に回した。

「そろそろ替え時かあ」

購入に際して総額の五割を負担した後部座席の占有者が、膝を折って車体を観察していると、幼なじみはすり切れた通学バッグに手をつっこんだ。

何やら、ごそごそ探っている。

「ハッピー・バースデー」

真意のわからない笑顔で祝福され、万希は表情も定まらずに“それ”を受け取った。

「あ、ありがとう」

17年目にして、どういう風の吹きまわし？とは言わなかった。

「開けてもいい？」

「どうぞ」

白い包みを開けると、碧海の色をした水晶のペンダントが、するりと顔をのぞかせた。革紐を通しただけのシンプルなルックスで、太陽にかざすと、水晶はまるで流動物を閉じこめてあるかのように色彩を変えていく。

海の青から夕闇の藍、やがて夜の紺碧へ・・・

刻々と移ろうその様相は、不思議なものを見ている、としか言いようがない。

「綺麗・・・」

恍惚と見入る少女を見つめて、送り主がアッシュ・グレーの瞳にわずかな哀愁をよぎらせ、何か言わんとしたのを、万希は見逃した。

(2)

2

高巳と別れると、梢に抱きこまれた石畳の参道をローファーで踏みすむ。鬱蒼うつそうと茂る青葉のなかで気温は二度ほど低い。やがて背丈ほどの石灯籠が立ち並びはじめ、正面に朱塗りもはげ落ちた鳥居が見えてくる。

50年に一度の定例祭祀ていれいさいし“水神祭”を控え、古びた神社は普段と打って変わり活気づいていた。

万希の実家の家系が代々護ってきた月城神社を、奇妙な男が訪れたのは、ちょうど17年前のことである。

子供の無かった神主夫婦は、晴天の朔の晩、黒装束と白銀の長髪を激しく濡らし、無言で立ちつくす男の腕の中から、生まれてまもない赤子を、心惹かれるまま受け取っていた。女兒は万希と名付けられ、歳月を経て人並みの女子高生に成長していた。

人並みと形容するには、少し器量が良すぎるが・・・

起源をたどれば平安初期まで遡さかのぼる月城神社が、奉っている祭神は二体ある。一方は竜神、もう一方は人神だ。

伝記の竜神は名を黒竜鵬こくりゅうほうといい、異世界から襲来した忌むべき魔物とされている。

天空を覆いつくすほどの巨体と、火走る赤みがかった黄金の角を持つ黒竜で、人界に三日三晩の天変地異を引き起こした。

これを収めたのが陰陽師・日向玄翠ひゅうがげんすいであり、弱冠20歳で命を落とした人神だ。

伝記のくだりによれば、日向玄翠の封印術により、黒竜の身体は灼熱の白光くわいひんをはなつて崩壊し、漆黒の豪雨となつて安城山に降りそそぎ、広大な池を形成したという。

池は後に水神池と呼ばれ、二体の御霊の墓場として、丁重に奉られることになった。

万希はそれこそ赤子の頃からこの神話伝説を聞かされて育ったが、肝心の巫女がまったくの不信心に徹している。

唯一の関心といえば、水神祭の儀式の一環で奉納される“鎮魂ちんこんの舞”という舞だ。祭が始まって千と数百年、口伝にて継承されている。日向玄翠が愛したと伝えられる舞なのだが、詳しくは伝記にも語られていない。代々の踊り子は月城家の血筋から選ばれてきたが、この年30代目の踊り子として名前を後世に残すのは、月城万希となった。

境内に入らず、石段の頂上に腰を下ろして涼んでいると、階下から声がした。

「万希ーいるかー」

別れたばかりの高巳だった。麓の料亭“音無おとなし”が、又倉家の城である。

早くもポロシャツにジーパンで、そして決定的なのは背中巨大なボストンバッグだった。ピンと来て、万希は駆けおりた。

「なにあんた、今度はどこに行くの」

「ちよつとな」

“行雲流水”と“無一物”が座右の銘である幼なじみは、入学以来一度も試験で校内順位二位より下に転落したことがないのに、学年一出席日数が足りていない。周囲に何も告げずふらりと姿を消し、数日経ってまたふらりと戻ってくる、なんていうことが多々ある。その失踪期間中、事実上の成績に限った優等生が、いったいどこで何をやっているのか、知っているのは万希と彼の履き慣らしたスニーカーくらいである。

物好きは“全国史跡巡礼の旅”をやっていて、万希の携帯電話は土産物のストラップが増大する一方である。

「しばらく戻らない」

相変わらずの言葉足らずは、具体的なことは一つたりとも言わない。

「次の水神祭が見られる保証はないよ」

アッシュ・グレーの瞳が曖昧に笑っているが、万希にはその意味が読み取れなかった。

「まあ、無理に詮索する気はないけど」

つとめて平淡な態度を作った。

「行つてらっしゃい」

「祭、頑張れよ」

軽く片手を上げ、灰髪の少年は踵を返した。

「……」

何かが確実に腑に落ちないのに、その違和感の正体がわからない

万希は、初めて幼なじみを引き止めたいと感じた。

「高巳」

喉まで出かけた声を、押し殺した。

どうしようもなく欠けているのは、ずっと昔からなのだ。

家族同然にお互いを知り、心を許し、ちょっと手を伸ばせばいつでも触れられる距離にいるのに、パズルとしてどこか不完全なのである。

ピースの空白は17年間同じ形をしており、ずっと埋まらない。それを言語化するのは難しく、愛や情や絆と言えなくもないが、どれも核心を突くものではなく、もっと根本的というか、普遍的な何かが初めから欠けているのである。

それが、月城万希と又倉高巳の手のつなぎ方だった。

(3)

3

今年還暦を迎えた万希の養母、月城咲子は、かつて日本の花柳界きつての花形芸妓としてその名をはせ、月城家に嫁いで引退してからも、度々出張して若手の育成に熱をそそぐパワフルな女性である。

この母の愛の貯蔵量といったら、中東の石油資源も匹敵できない枯渴知らずで、おかげで一応は健全な人格と、血色の良い頬、生気さんさんと輝く瞳を持ちえた一人娘なのだった。

「今晚は快晴ですって」

キッチンに立つ母の声が踊っている。

「時の経つのは早いこと。万希さんが鎮魂の舞を踊る日が来るなんて」

なぜか娘に“さん”付けするのは、この里親の癖だ。

「はいはい」

もごもごと万希は遮った。

出陣を控えた巫女の御前にはバナナが一房置かれている。大事な舞台の前の“本番前バナナ法”で、運動に必要なエネルギーと、頭脳に必要な糖質とを即座に補充する。



「私が踊ったのが、まるで昨日のことのようだわあ、って、二二二週間で何回言ってるか分かってる？23回」

「あら、嫌な趣味。そんなのを勘定してたの」

「今言ったから、24回」

「あと少し・・・あの人が頑張ってくればね」

妻より上に一回り年齢差があった養父は、寿命を全うして早五年になる。

「三途の川、逆走してでも見にくると思うよ、あの父は」

「娘の一世一代の晴れ舞台ですからね」

「一世一代の大惨事になったりして」

万希はバナナの皮を部屋の片隅のごみ箱にシュートし、元No.1芸妓のお叱りを受けた後、舞台装束を一式抱えて境内へ出た。

ほの暗い夕闇が漂う中、星の輝きはじめた紺碧の空へ向け、神聖な御焚火の炎は光の花弁を豪然と吹きあげる。

境内を囲って数百の口ウソクに火がとまり、山の霊気と祭典の緊張感とで神妙な夜気である。

拝殿の後方に、水神池を背にして設置された檜ひのき舞台は、白地に金の刺繍を配した幕がめぐらされ、清めの儀式が行われている。

まもなく太鼓とホラ貝が鳴り、拝殿から紙覆面をした社人がすり足で出てきた。

人込みに視線を迷わせて、万希は探していた。いるはずのない、灰髪の幼なじみである。

社務所で踊り子として作りこまれていく間も、鏡を眺めながら心は落ち着かない。

白の小袖に緋の袴はかま、加えて頭には金の花天冠はなてんかんが添えられる。髪の毛の長さを足すために義髪ぎはつが付けられ、肩のあたりで一つに結び、残った腰下までの部分は等間隔に水引みずひきで束ねられていく。顔に白粉が落とされ、目元には薄紅、口唇には真紅がのせられた。

「万希さん、鈴を」

差し出されて、ようやく意識に焦点が戻る。

神楽笛が一切の雑音を取り去り、舞台を囲んで水を張ったような静けさが薄闇を支配した。

滑るような足つきで舞台へ向かいながら、万希はようやく自分の本心に気付いていた。

私は、不安なんだ。

この舞台の下に、高巳がいないこと。

初めて行き先を告げてくれなかったこと。

馬鹿みたいに、なぜかとても怖い……。

シャラン……

高く、低く、しなやかに、しなやかに

炎のゆらめく幻想の中で、踊り子は神に操られる蝶である。

流れる笛の旋律は、聴覚より深いところに染み渡って、万希を呼び醒ますのだった。

あらかじめ自分の魂と共鳴するように、作られた曲

……なぜかそう思えた。

その宵、天は確かに宇宙を透かしていた。

あお 碧く暗い美しさで、地上の者たちを無限の深淵<sup>しんえん</sup>へ吸いこもうと、沈々たる色香で誘っていた。

しかし、厳かな神宴には異変が起きていた。

水神池の真上で煌々と輝いていた満月が、にわかに沸きたった雲海に飲みこまれたのである。雲は全天からさざ波の立つように集結し、まもなく完全に星々のきらめきを覆い隠して、やがて緩やかに渦を巻きはじめた。

会場がざわめく。

しかし踊り子だけが音楽の止んだのにも気付くことなく、ひたすら舞い続けている。

「なんだこれは！」

「・・・まるで竜神が覚醒したようだ」

周囲の叫喚も、舞台上の少女には定かでなかった。

誰もが茫然自失として天空を仰ぐなか、風も無いのに鎮守の森がざわざわと揺れ、地面がごうごうと音を立てはじめた。

その時突然、水神池からまばゆい光が上がった。

ようやく現実に戻された万希は、前方の光景を目にするやいなや、蒼白な顔でふらふらと崩れ落ちた。

水底から池全体を焼失させるほどの強い光である。

「見ろ！何か上がってくる！」

背後から飛んだ金切り声が、辛うじて万希の意識にふれた。

球状の発光体が、水面に陣風を巻き上げながら浮上してくる。掌ほどの大きさで実体がない。

一層強い光が四方の景色を消し去り、あまりの眩しさに誰もが目蓋を覆うなか、若い踊り子だけが凝然と動かず、漆黒の瞳に恐怖をみなぎらせていた。

彼女の中で眠り続けてきた膨大な無意識が、その光を知っていた。

刹那に万希の視界は真っ白になり、三半器官が悲鳴をあげた。心臓が動転し、一気に何もかもが消失した。

星降る夕闇に雷鳴がとどろくなか、万希は“空”を疾走していた。遙か下方の、雪の降りたような花園に、巨大な影が走り抜ける。地に落とした黒い輪郭は、長大な両翼、分厚い三つの尾を持った鳥の姿だ。

白銀の衣をまとった万希は、鳥の背で叫び声をあげた。

「カルラ、私達追われているわ！」

「数は幾程か」

足元で莊嚴な声が答えた。

「50・・・いえ、30騎に満たない」

「おそらく本軍ではない。だが、見つかるべきではなかった」

黄金の巨鳥は、身におびた目の眩むような光輝をいっそう激しく放出したと同時に、一気に加速した。

戦禍の咆哮はやがて遠のいていき、眼下の花園がついに切れると、荒涼とした岩肌の大が現れた。生温い風が不気味にうなり、低く

たなびいた雲から、煙雨えんつが降りそそいでいる。

霞かすみが視界をばやかす先に、すらりと伸びた楼閣ろうかくが出現した。その外観は五重の塔を想起させるが、あでやかさは皆無である。

万希を乗せた巨鳥は、目的の場所へ向けて緩やかに高度を落としていく。

楼閣の頂に降りたつと、目前には「世界の果て」とでも形容したくなる光景があった。そこで岩地は途切れており、見下ろすと、切り立った岩壁の遙か遙か下を、もやのかかった黒い波がうごめいている。

万希が慣れた動作で鳥の背から降り、哀惜あいせきの意をこめ、さすがのように身体を寄せると、案内者はそつと翼を広げて、小さな少女をやりわらかく抱き包んだ。

「お前をここへ連れて来たくなかった」

万希は温もりに心もうずめて、静かに首を振った。

「お兄様を宜しくね」

二人は最期の別れではないことを目話し、力をこめた眼差しを交わし合った。

「核宝珠かくほうじゆは、必ず私が守ります」

ひらりと身を投げると、白銀の少女は流星のように降下していった。

待ち受ける海原を、まっすぐにとらえて。

鼓動の緩やかなリズムにあやされている。

このまま永遠にこうしていたいとさえ思った。

天国がどういう場所かは知らないが、多分この温もりに勝る安堵など、世界中を探しても見つからないだろう　そう思った。

誰かの腕の中。

ここを

永遠の宿り木にしても、いいですか　？

そして、夢は途切れてしまう。



(5)

5

目覚めると、見慣れた自室の風景があつた。

今しがたの出来事は何だったのかと、遠のいていく記憶の手綱たすなを夢中でたぐり寄せたが、間に合わなかった。それが現実か悪夢かどうかすら、もはや分からなかった。

「気がついたのね」

穏やかな声とともに、深い薄茶色の瞳にのぞきこまれて、万希は数秒の間ぼんやりと停止していた。

「お母さん・・・どうして」

「昨晚から、ずっと気を失ってたのよ」

「きのう・・・」

脳裏に霧がかかっている。

「万希さん、水神池が大変なのよ」

母の静かな声に動揺があつた。

ようやく顕在意識が定着しはじめ、昨夜着た衣装のまま外へ出る。

記憶の隙間を縫い合わせようと、細かく“その後”の一部始終を聞くうちに、水神池に到着した。

・・・やいなや、それ、は指摘される間もなく視界を鮮烈に染めあげた。

息の止まるような、ピンク。

「うそ・・・」

万希は絶句した。

「今朝来てみたらこれよ」

母は魂の抜けたように言った。

「こんなことは神社始まって以来・・・」

照りつける真夏の日差しと、蝉の合唱と、一面のピンクの眺望は、はなはだしく不調和だった。春を迎えてさえ、花付きも寂しい桜林が、池をぐるりと囲んで盛観なまでの咲きようである。否、もはや咲いたというより、爆発したという表現が近い。

未恐ろしく思う

同じく棒立ちの社人達から、虚ろな眩きがこぼれた。

中断された水神祭は急遽延期された。

そして、にわかに周囲が騒がしくなったのは翌日からである。

セーラー服に通学バッグを引っかけた万希が、課外授業のため玄関を出た途端、炸裂するシャッターの嵐が一斉に襲いかかった。

境内は報道陣でごった返していた。話しかけてくる記者をするりとやり過ごし、逃げ際にかえりみた全体像のその奥で、なお悠然と風に揺れる優美な淡紅色に、万希は閉口した。

「ありえない」

参道を駆けおりて鳥居をくぐると、万希は脱力した。路地に出で、相変わらず動かされた形跡のない幼なじみのおんぼろ自転車を横目に、さらなる脱力感がのしかかる。無言でそれを引きずり出すと、乗り慣れない運転席に腰かけて、もう一人の主は海へ向かって下り坂を発進した。

万希の通う共学の公立高校は、県道をはさんで漁港の反対側に建っている。

「又倉はまたサボりか」

担任“メガネ”は教壇から明らかに万希を見ていたが、少女がペン回しをしながら「さあ」と言うよりも早く、出席簿に斜線を引いたのは、ためらいがなかった。

「なんでもいいから、電話一本は入れろと言っといてくれ」

このじいさんは、自分を又倉高巳の恋人とでも思っているのだろうか、と、万希はうんざりした。恋人であれば、電話は繋がらない、メールは返ってこない時点で、授業になど出られた精神状態ではないと言いたかった。

その時間中、黒板から最も遠い女子生徒は、輝く海を眺めながら、机に頬をあずけてほとんど死んでいた。

いつの間にか眠っていた。  
そして、またあの夢を見た。

降りそそぐ黒い炎に、焼きつくされる純白の花園。薄紅色の天空を踊り狂う、真紅の瞳の守護神。

「核宝珠は必ず私が」

突然身体が受動的に揺れはじめたのは、授業開始から半刻が経過した頃だった。体感震度でおよそ2、3と見当がついたが、クラスの動揺はほとんどない。皆ひそひそと囁き合っただけで、地震大国とは半世紀の付き合いである白髪五割の史学教員は、淡々と板書を続行する。

「やけに長いな」

秒針が一周したあたりで、不意に誰かが呟いた。

その時である。

せきを切ったように、凄まじい不協和音が万希の鼓膜を襲った。

「・・・ッ!」

激しい耳鳴りだ。

「たまらず悲鳴を上げた最後列の女子生徒に、クラスの視線が一気に集中する。」

「月城? どうした」

担任の声が遠のいて聞こえる。

「す・・・いません」

頭を抱えこんで、万希はふらりと立ち上がった。反動で椅子が倒れ、派手な音が鳴った。

「ちよつと・・・保健室に」

皆の視線を振り切り、万希はよろよろと教室を出た。

全身に鳥肌が立っている。自分の手足の温度が分からない。強い吐き気で足速にトイレへ駆けこむと、万希はただちに二足の自由を失った。

正面から、黒い煙のようなものが這いずってきたのである。

「きゃあ!」

再び廊下へ出ると、段飛ばしに階段を駆け降り、保健室へ続く一

階の渡り廊下へ折れた。そうして、またしても異形のそれに対面した。壁に、天井に、黒い煙はじわじわと手を伸ばし、向かう先に闇が生成されていく。

「な、何よこれ！」

よく観察すると、それはさらに無数の黒いふし穴を含有しており、直感的にそれは眼球であると分かった。二つが対を成しており、集団化して蜂の巣状に見えるのだ。

もはや、真偽うんぬんの話ではない。

正気の沙汰じゃない

霞んでいく意識のなか、万希は思った。

理性のわずかな生き残りが、早く逃げろと金切り声をあげていた。

解凍した足が独立した意志をえて、転がるように走りだした。本人のコントロールはすでに機能していない。その間も、得体の知れない黒い侵入者は、窓という窓からでたらめに流れこみ、少女を上へ上へと追いやっていく。

屋上の扉を開けるしかなかったのは、結果だった。

しかし、万希はすぐに逃走の無意味を理解した。

“おおもと”は外の世界にいたのだから・・・

四階建ての校舎はすでに、うごめく闇の中に飲みこまれていたのである。

侵入者は　否、侵入者の群れは、落下防止のフェンスを乗り越

えて、四方から彼らの“仕上げ”にかかっていた。

扉に張りついたまま、万希はようやく自分が狙われていると自覚した。

「ソレヲワタセ」

地を這うような声がした。

「ソレ、欲シイ・・・」

物理的に発された声ではない、と分かった。少なくとも、鼓膜を経由した声ではないと。

万希はドアノブを片手に握りしめ、わずかに身を乗りだし、黒いふし穴の群れを改めて注視した。心霊現象とはまるで縁がなかった半生だが、確信めいた答えが芽生えた。もちろん、原始的な感覚の助けによって。

“彼ら”は、死人だ。

ならば、なぜ自分が狙われるのか？

冷静さを失った万希は、思考を巡らすことができずにいた。迫り来る闇の手は、自分の持つ何かを欲している。しかし、皆目見当がつかない。

「ヒカリ、欲シイ・・・」

「光？」

体感できるのはその冷たさだけの、感触のない黒い腕が無数に伸びてきて、万希の下半身をとりまいた。

「いやあああああ！」

誰一人助けは現れない。これまでの命かもしれない、と、誕生日が明けて間もないセプティーンはあえいだ。今や彼女の身体はどつぷりと闇の渦中かちゅうにあり、極度の悪寒が五臓六腑ごぞうろくぷを這いまわるのを許すしかなかった。

「助けて……」

不謹慎ふきんしんにも、こんな時に浮かんでは幼なじみの笑顔だった。

万希の手は、無意識に胸元の碧い水晶を握っている。

「高巳……」

遠ざかる意識のなかで、気のせいだろうか　あたりが青く輝く幻覚を見ていた。

そうして、ついに回避不可能の、黒い執念の餌食えじきになるはずだった。



(6)

6

どのくらい経っただろうか。

目蓋を開けた先に、細い白月が浮かんでいた。辺りはどつぷりと暮れた宵闇よいやみに静まりかえり、断続的に虫の音が響いている。

「・・・？」

身体を起こすと、こめかみを鋭い痛みが通過した。今しがたの地獄絵図が思い起こされたが、それならここは、天の蓮池だろうか。ぼんやりとしながら、夢遊病患者は足取りも危うげに水鏡をのぞきこんだ。映ったのは月と、げっそりとしたセーラー服の少女だった。

「確か、学校にいたはず・・・」

万希は記憶を反芻していたが、ふと、水面に映った自分の胸元が碧く光っているのに気付いた。思わず実物に目を向けると、幼なじみからのプレゼントがホタル石のように発光している。

そして再び顔を上げた先に、同じ光がちらついているのを見た。

水神池の対岸へ歩みを進める。光に近づくにつれ、夜目も利くようになってきた。

万希は突然立ち止まった。その光が人間の五指の中にあることを見定めたからである。薄闇に浮かびあがったその身体が、生きた

者のものなのか否か、判然としない。

さらに近寄り、死人のような青い顔を見た後、視線を動かして、万希の瞳の奥は氷結した。

着衣のはだけた上半身はケロイド状に焼けただれ、その身体は色の分らない水に浸っている。

「血・・・？」

万希はしゃがみ込み、震える指先で液体に触れた。ぬめつとした生々しい感触があり、一気に背中を悪寒が走る。脳裏を生と死の二文字が、走馬灯のように駆け巡った。くじけそうになりながら、気持ちに喝を入れ、少年の胸に耳を当てた。

そこでは かすかではあるが生命の律動が、しかし死へのカウントを刻むように、弱々しい音を立てていた。

少年の行く末を決定づけるのは、自分の次の行動だろう

万希の心臓は早鐘を打った。選択の余地などない。一刻も早く、救命病棟へかつぎこむべき相手だ・・・

その時である。

少年の瞳がわずかに開いたのだ。

万希と彼は至近距離で相對している。しかし、重傷人の視線は万希を通りこして、虚空のあらぬかたを泳いでいる。

「は・・・」

繊細な口元が非対称に歪んだ。

「こんな所まで・・・追ってきたのか？」

目前の少女を認識している様子ではない。自身の幻覚のなかで朦朧もろうとしているようである。

命を絞るような挙作きよさくで上半身をゆっくりと起こし、自らの血溜まりの中に震える片腕をついた。

「殺すなら早・・・く・・・ゴホッ」

「う、動かないで！」

たまらず、万希は両腕で少年を支えた。

そのまま、沈黙が流れた。少年の焦点は虚空こくうの一点に静止したまままだ。そうして不意に、虚ろな瞳の片方から一滴の輝くものが滑ったのを、万希は息をのんで見ていた。

やがて彼の瞳は閉じ、万希の両腕にはどっと重力がのしかかった。

「しっかりして!!」

激しく揺すったが、今度は完全に少年は人形と化していた。目を見開いたまま呼吸を忘れた少女の前で、少年の頬の透明な痕跡は乾いていく。

地面に転がった血まみれの腕を万希は手に取った。汚れた掌から、光も薄れはてた碧の水晶が滑り落ちた。

脈はなかった。

17歳の少女は、初めて人を看取った。

悲しい、という気持ちはなかった。素性も知れぬ謎の負傷者が、さだめのままに命を今、終えたところ。

それだけであるはずなのに、気が付けば、万希はとめどなく涙を流して、役目を終えたぬけがらを抱きしめていた。

無意識下で、目の前の少年がもう二度と帰らないことと、灰髪の幼なじみが連絡を絶ったことが、なぜかリンクしていた。

「戻ってきて・・・」

万希は少年をきつく抱いた。

ドクン

かすかな心音が、万希の鼓膜を震わせた。  
もう一度・・・

ドクン

身体を離し、骸をかえりみると、神とも妖精ともつかぬ光の粉雪が少年を包み、ちらちらと輝きながらヴェールを成している。

理由などなしに、二人を包む光は絶対的な幸福であり、その無条件な愛は遠い母の記憶に近かった。そして不思議な光は、万希の心

をも温めていく。

少年の鼓動は次第に規則正しいリズムを刻みはじめ、凍りついた口元には温かな吐息が戻ってきた。

季節はずれの夜桜が、風に吹かれてはらはらと舞っている。

少年を背負うと、万希は、幻想の宵の中を半ば夢見心地で去るのだった。

## 第二章 “紅き落胤（らくいん）” （1）

都のと真ん中である。

風雲落雷の渦中で、身に踊りかかってくる“異界”の猛者どもを、かきわけ踏みこしながら、目指す先の“台風の目”が、文字通り晴天の無風地帯であれば良いのだが、と、赤髪紅眼あかがみあかめの美少年は片頬を歪めた。

血気にはやる気鋭の陰陽師らにまぎれて、その使徒に成り下がった魑魅魍魎ちみもうりょうや、どここの馬の骨かも分からない妖怪たちが暴れている。概して総勢百名あまりの陰陽使いがひとところに終結し、なりふり構わず力を解放すれば、天気も荒れるし、野次馬も沢山いらっしやるのである。

渦巻く叫騒きようそうが猛りなのか呻きなのか、もはや周囲の敵、味方すら判別不能だが、かえりみれば自分には味方などなかったのだ、と、17歳の陰陽師は思う。

豪華な桜吹雪ざんげは、漆黒の闇夜に命を散らして

時は平安末期、晩春。

青年は、初めから大きな野望を抱いていたわけではなかった。  
まだ自我も芽生えない頃から、陰陽道の過酷で非情な訓練をほど  
こされ、気付いた時には陰陽血族“日向”<sup>ひゅうが</sup>一門の宗家次代後継者の  
地位を約束されていた。

青年の名は、日向無双<sup>ひゅうが むそう</sup>という。

「この世は、グズだ」

両手の指で歳を数えられる頃からそのような悟りがすでに根付い  
ていたのは、幼稚な被害妄想からではなく、稀にみる鋭利な頭脳と、  
陰陽道という特殊な土壌にはぐくまれた心眼<sup>しんがん</sup>と、この世に生を受け  
る以前から彼の魂に刻まれていた心髄とでもいうべきものが、一同  
に会した結果だった。

「初代様の再来」と讃えられた嫡男<sup>ちやくなん</sup>は、当時、陰陽界の双壁<sup>そつへき</sup>だっ  
た安倍・賀茂の影に入り衰退しつつあった老大家にとって、輝かし  
い導師であり、近い将来宿敵を沈めて、日向一族の再興<sup>さいこう</sup>はもはや秒  
読みと思われた。

だが、一族の期待に“新星”は一切なびかず、常に色眼鏡で世界  
を見ていた。

無双の父親は、そんな嫡男を「大成する器の持ち主」と絶賛し、  
盲目なまでに溺愛したが、幼い息子は、肉親の愛情すら彼らの屈折  
したエゴでしかない洞察していた。

かくして1158年、宗家の嫡男は平家一門の専属陰陽師として都へ迎えられたのであった。

13歳になって日も浅い出来事である。

それまで政界にのさばっていた王朝貴族というのは皆保守的で、固定観念を愛してやまない慎重派だった。

894年に貿易国との友好切符であった遣唐使が廃止されて以来、国はほぼ鎖国状態になってしまい、貴族たちの関心の矛先は、もっぱらくならない権力闘争へと向いていた。

この頃、伊賀・伊勢を基盤に、かつての天皇家の血筋をくむ桓武平氏の一族が、度重なる武力的功勞により、きわだつ興隆をみせていた。極めつけは、武士として史上初めて太政大臣だじょうだいじんの地位に清盛は、決して武力だけで覇者の玉座を手に入れたのではない。まず、政治家に必須の処世術に長けていた。対立する天皇親政と院政の間を巧みに泳いでわたり、非常識な段跳び出世を成し遂げた。そして時代の先見性があった。朝廷が意固地になって門戸を閉ざすなか、勝手に宋国との対等貿易をおしすすめ、文化、金銭、両面において停滞していた国内に新風を吹きこんで活性化させた。

日向一族は宗家分家をあげて無双の昇進を祝福したが、当の出世頭は、自分より27回り年輪の厚い天下の枢軸を見上げて、「さしあたっての暇つぶしが見つかった」との感想が右から左へ通過したにすぎなかった。

陰陽師という職は、吉凶の判定や除災をおこなう術師のことである。

例えば無双は、公卿らが隠密に計画している清盛の闇討ちなどを占いあて、事の起こる前に陰陽術によって始末してやる。また、敵



方に雇われた同業者から一門を守るのも仕事のひとつだった。

だが、無双の食指を動かすような陰陽術をもって攻撃を仕掛けてくる相手は無に等しい。

今に始まったことでもなかったが、未来永劫と続くだろう空虚な日々は、日毎に、確実に、若い青年陰陽師を蝕はじむんでいくのだった。職業がら飽きるほど相手取ってきた、人間の欲あまたの粘着質ねんちゃくしつな悪臭は、そういう要素を持ちあわせていないこの陰陽師にとって興味深く、また、嘲弄の対象でもあったが、それすら彼の好奇心を刺激できなくなると、20歳の無双に残ったものは、一生がかりでも使いきれないほどの莫大な褒賞金と、慢性的な倦怠感の支配のみであつた。

そんな折、運命を大きく変える出来事はやってきた。

ある女との出逢い

神々しいまでの完璧な美を備えた女だった。豊満な肉体と、氷のような容貌と、月光を浮かすような白い肌を輝かせ、挑発する妖艶な微笑みを放つ、そんな女だった。

一瞥いちべつのうちに無双は女がこの世のものではないことを悟ったが、魔物の類が身におびる禍々しい妖気は感じとれなかった。明らかに別格の、洗練された

女の妖気は闇より深い黒色をしていた。

無双はその夜のうちに女と契りを交わした。そしてそれきり女は姿を現さなかった。

翌年、史上最年少にして日向宗家当主の座を世襲し、宗家の正妻には三人目の赤子を身籠らせていた。

二度目の逢瀬<sup>おっせ</sup>が訪れた時、闇をまとった天女は、かつての面影が見る影もないほどに枯れていた。匂うような玉肌は土色にやつれ、官能的な花唇<sup>かしん</sup>は潤沢をうばわれ青紫にしなびて、両眼に浮かべた惑わす紅色の光彩までもが黒ずんでいた。

「こつち」は、そなたにくれてやる」

枯声に怒りと嘲りをふくませて、わなわなと震える女の腕には生まれて間もない赤子が抱かれていた。

沈黙に立ちつくす父親の胸にわが子を強引に押しつけると、無条件に生命のほとんどを吸いやられた母親は、宙に身を投げ、その“真実の”姿を悠然と天空に示した後、卑屈な微笑みひとつ、半瞬にして直角に夜空を駆け昇って消えた。

肉親に放棄されたゆえの哀哭<sup>あいこく</sup>が、待ち受ける受難<sup>じゅなん</sup>への恐怖であるのか

ひたすら泣き叫ぶ男児の手をとり、物心ついて以来、初めて経験する感情の高揚に、新鮮な喜びと驚きを覚えた冷眼無口<sup>れいがんむくち</sup>の敏腕<sup>びんわん</sup>陰陽師は、全生命を依存するただ無垢なかたまりに名前を付けてやることにした。

太陽が地に没する寸前に放つあの断末魔の色

焰<sup>えん</sup>

(2)

2

「どうして僕の目や髪はみんなと違う色なの」

ようやくできた遊び仲間が、また一人、また一人と親に手を引かれて去っていくたび、旧家の末息子<sup>いきい</sup>は行き場のない憤りを黒髪の母親にぶつけてきた。

他者に強烈な印象を与えるのは、その両眼のガーネットの原石と、夕焼けのような髪色のせいだが、この異質な身体的特徴が、日向焰<sup>ひゅうが えん</sup>の幼いながらの人生を少なからず左右してきた。

焰がまったく面識のない大人達からおぞましいものを見るような目で観察されるのも、宗家の兄弟から侮辱されるのも、陰陽道の大家にいて彼だけがその教育を享受できないのも、みな先天的な置き土産<sup>さんぶつ</sup>がもたらした産物ならぬ惨物<sup>さんぶつ</sup>だった。

焰の育ての母、日向なつめは、名のある世襲神職<sup>せいしゅしんしやく</sup>の血筋に生まれ、彼女と同じく当時16歳だった陰陽大家の嫡男と、一度も顔を合わせないまま結納の日を迎えた。

特殊な家柄ゆえ、世間との接触を好まない日向一族は、何代も前から都からはるか北の山奥<sup>いんせい</sup>深くに隠棲してきたため、隔離された辺境の異界で幽閉も同然の生活を強いられてきた嫁であった。

しかし、閉ざされた世界の中でさえ、穏やかな微笑みがかぎりなく優しい母であった。

焰が心を許せたのは、母なつめのやわらかな手が舞い降りて、春の陽光に似たぬくもりが頬を温める一時と、夢も見ないほどに眠りこんだ深い闇夜だけで、肉体的ではない慢性的な苦痛に忍耐という縄をかけ、いつかは訪れるであろう離別を密かに予感しながら、ただじつと耐え続けるしかなかった。

そして、運命は文字通り少年をさらにやってきた。

10歳の長い冬の出来事である。

屋敷の裏手にある井戸へ水くみに出かけた一瞬、焰は覆面を付けた数人の男達に拉致された。

彼ら賀茂家の隠密は、日向の空に昇った太陽が作りだした影と言えよう。

安倍家の清明、日向家の無双のような卓越した奇才をついに輩出できずに、賀茂一族は数百年の停滞をうれえていた。

もし賀茂に頭脳があれば、まだ手つかずの異色にして未恐ろしい才能を、大輪の花ひらく“金のなる樹”に育てあげることでもできたであろうに、せっかくのチャンスは、停滞の憂鬱が産みおとした拙劣な浅知恵によって、むなしくも風塵と帰ってしまったのである。

実父・無双は、生まれてまもない赤毛の息子を正妻に預けたきり、その後の消息が分からなくなっていた。彼が清盛の屋敷に戻ったのは、その年の秋のことである。

脅迫じみた“取引状”を受け取った無双が、ほとんど閉口して、単独で敵地のさなかへ赴いた時、訳も分からず監禁されていた人質は、記憶上初めて実の父親と対面した。

焰は、その場に居合わせた賀茂家の陰陽師を、一瞬のうちに全滅させた宗家当主の強大な神通力よりも、自分の父親の目と髪の毛の黒いことに驚愕していた。

感情のパレットの絵具が極端に乏しい白皙冷眼はくせきれいがんの男は、今しがたむずがゆい抵抗を示した宿敵の首を手にとり、冷ややかにわが子を見つめた。

「お前に陰陽道を教えてやる」

これより数えること一千日。

時間も方角も分からない山奥のそのまた奥地で、焰は生き地獄を見ることになる。

そして来たる999日目、前代当主でさえついに会得できなかった日向開祖きつての陰陽術奥義、“導光神来迎どうこうしんらいよう”をあつかう史上三人目の術者がこの世に誕生した。

そして千日目の夜

300年続いた宗家の血筋が、二人の例外を残して、永遠に途絶えた。

燃えたつような不気味な夕闇のなか、宗家は山ごと大量の黒煙を噴きあげ咆哮ほうこうしているかに見えた。熱風が暴れ灰が踊り飛び、呆然

と立ちつくす焔の目前でかつての巨大な牢獄はひたすら崩落していくのだった。そして、黒髪の母親は灼熱しゃくねつの海原で短すぎる生をひっそりと終えようとしていた。

安穩や平和とは宿命的に無縁なわが息子に、血の繋がらない母は初めて彼の真実を語り聞かせた。白い頬に絶望の影を落とした13歳の息子が輝く金の涙を流した時、彼に人の心を宿した唯一の人間はこの世を去ったのである。

(3)

3

灼熱の閃光に四方から襲撃され、戦場の兵力のどこにも属さない赤毛の一匹狼は反射的に宙へ跳んだ。一躍で10メートル上方の空気を吸うことができる。驚嘆して敵が一瞬の硬直状態をつくったのを、天狗少年は見逃さない。落雁のごとく下降して一刀即伐する。

「宗家の末息子だぞ！」

「討ちとつて名を馳せる！」

奮起して群がりくる俗兵達を焰は愉快げに迎えた。一端の名門陰陽師が同業者の力量も目算できないのかと呆れたのである。

「浪費ぐせの素人め。欲に目がくらんだか」

神通力をかよわせた刀身は蛍石さながらに輝き、筆致流麗とした青い曲線が敵の挟間に道を開いていく。

「紅き落胤が・・・」

皆、臨終のあらがいは精一杯の精神攻撃と決まっている。崩れていく敵陣に絶世の美少年は氷の冷笑をはなむけてやる。

賀茂の残党の報復の炎が宗家を焼きはらってから四年の歳月が流



れていた。

感情のほとんどをみずから麻痺させた混血の生き残りは、先天的に授かっていたものの未だ未開の地に息を潜めていた怪物を、流浪の数年の間に手なずけていた。

しかし焔がその強大にして巨悪な能力を他者に披露することはこれまで一度たりともなかった。“黒い方の血は使うな”　かたくなに守ってきた自己誓約は、魔物の力を借りることすなわち己の敗北だという認識からきていた。

陰陽大家、日向と賀茂　互いに宗家を討ちとられ四年の間冷戦状態にあった双方の分家に、開戦の地雷を踏ませたのは、漁夫の利が目当ての第三勢力、安倍家だった。安倍にとって最も望ましいシナリオは、実力の拮抗する両家が互いを仇と見なしているうちに潰し合い、戦禍にのまれて日向の当主は失脚、平家一門とその庭園朝廷という名の　は全面的に安倍と契約、陰陽界は安倍という枢軸に一本化される・・・というような流れだった。

とはいえ、日向宗家の焼き討ち事件からは干支が四回変わっている。それまでただ待つのみだった漁夫が自ら地雷を設置したのは、「せざるを得なくなった」理由があったのである。

日向分家の中で、新たに宗家の構築をもくろむ革新勢力が起こったのだ。

実際、奇抜すぎる現当主は異界の混血児をかばって宗家崩落の原因をつくったばかりか、その優れた千里眼せんりがんをもつてすれば未然に防げたであろう惨事を平然と見過ごし、のうのうと最高権力を笠に着て横着を決めこんでいる。

日向無双を失脚させる計画が内密に企てられると、共通の敵を認識する意味で賀茂との協定も視野に入ってくるし、入れなければな

らないだろう。日向無双を落とす、とはそういうことであり、それは宿敵とて熟知している現実だった。

たとえ一時的であるにしろ、安倍はこの同盟関係を恐れていた。そしてこちらのシナリオが時とともに現実味を帯びてきた。しかし両家の間に一触即発の空気が充満している事実は依然として変わらない。多少指で突いてやれば恨みの貯水池を決壊させることは造作なかった。

安倍の狡猾さは相手にとって痛切なトラウマを再現したところにある。日向の次代当主最有力候補の嫡子<sup>ちやくし</sup>を賀茂に拉致させたのである。無論、真実は安倍の芝居である。偽造された脅迫状<sup>けきこう</sup>を真に受けた日向は、手法自体この上ない宣戦布告だと激昂し、この上ない返答をもつて応じた。

かくして後に陰陽戦争と語り継がれる異色にして歴史的な戦役が幕を開けたわけだが、幸か不幸か、予定外の飛び入りゲストによって戦況は安倍の思惑からそれていくことになる。招かれざる客の名は日向焰。戦場の誰もがその“悪名”を知っていた。

正当防衛のたびに不本意な戦功が積み重なっていく熱意なき参戦者は、はるか前方にひとときわ輝く先陣をとらえると足を速めた。どこにしようが明らかすぎる神通力の鮮烈な光彩……。巨大な光の半球が前方に現れ、数秒後、元の暗闇には直径50メートルほどの空白地帯が地面を丸く切り抜いていた。

四年ぶりに父の術を見た、と、焰は薄く笑った。一千日の修行の日々が思い出された。父、無双は扱えるすべての陰陽術を一族のはぐれ者に伝授した。その真の思惑などは知らず、懸命な努力をもつて応えてきたかつての自分が、今となつては滑稽だった。

焰は刀を鞘に納めると、返り血に染まったどす黒い着物の襟元を

正し、正面の人物へと歩みを進めた。無双の術の前に放心状態の敵兵達はおとなしく、自分の歩く道を開くために余分な労力を使う手間が省けた。

薄黒いガラス玉のような眼が興味深そうに焰の表情を探っている。

「さて、これは奇なること」

低い声にどことなく蜜のぬめり気があった。

「珍客だな。師に何も告げずに四年もの間、どこへ身を寄せていた」

腰まで垂れる黒髪にまばらな銀髪が混ざりこみ、黒の狩衣かりころもに同色の差貫さしぬきの出で立ちで、長身の男は身ぎれいなものである。傷のひとつも見当たらない。

焰は沈黙している。無双の声も途切れる。互いの眼を射たまま凝然と動かず、長い空白を雷鳴だけが埋めていく……。

突如として、あらかじめ取り決めていたかのように、両者は両手に同じ印を結んだ。

「導光神来迎！！」  
どうこうしんらいこう

双方の掌に洞門が開き、目のくらむばかりの巨大な光の竜がその上半身を虚空に乗り出し、かっとう口を開いて中央で激突した。

闘志隆々、奔走していた戦場の勲臣達は、一同に足並みそろえて生きた“ぬけがら”と化した。これまでも彼らは、仕事の依頼となれば、相手が人であれ、死者であれ、同業者であれ魔物であれ、苦学と、生死を賭けた修羅場で体得してきた揺るぎない自信とによっ

て、状況に応じた適確な対処と、岩山の鎮座を彷彿とさせる冷静さを示してきた。しかし、その識力こそが彼らを凍てつかせたのだ。とりわけ、その竜の何たるかを知っている日向一族の者にとって、目前につきつけられた光景はわずかな未来への希望的観測をも完全に断念するにふさわしかった。

白いブラックホール、とても形容しようか。ただし引力の餌食になった者には本物のそれに吸い込まれる以上の恐怖と絶望とが待っている。なぜなら彼らの行く先は宇宙空間の片鱗ではなく、敵の術者の掌だけが通り道の永久牢獄なのである。無論、この通路は基本的に一方通行である。所有者が気まぐれでも起こさない限りは・・・。

白い巨大な竜は互いを吸収して一気に膨張し、天高く螺旋を描いて渦を巻いている。紫電しでんが乱れ飛び、凄まじい引力である。

見ると、周囲に散在する敗者達の残骸から次々と靈魂が上がっていく。鼓膜を切り裂くような絶叫は、常人の耳には風鳴りとしか認識されないであろうが、死者たちのおぞましい断末魔だ。焰は術の会得中、片耳から血を流したことがある。

「この業うつつは千年の無限地獄の上をいくだろうな」 教えた方は軽快な口調でそう言ったものだ。

戦闘至上主義者。せんとうじょうしぎしや

父の魂に備わる、核と言ふべきものだろうか。

日向無双は平穩の波間に長く身を浮かべることができない。苦悶、不眠、幻覚などの禁断症状が表出するのである。児童期の彼の趣味は山犬の虐殺だったし、思春期は地縛靈じはくれいを陰陽術にかけて遊んだり、仕事で手につけた優秀な同業者を靈魂になっても繋ぎとめて、魂が

すり減るまで戦闘の相手をさせたりした。

しかし、平凡な“精神安定剤”は次第に効果を示さなくなってきた。まともに精神生活をこなすために、強力な常備薬が必要だった。

まだ幼い息子はそんな事情などは知らない。「自分は期待される存在なのだ」「強くなればもつと求めてもらえる、愛してもらえる」

虐げられたことしかない混血児は肉親の欲求を満たすことに存在意義を感じた。その愛が“まがいもの”であるとも知らずに・・・。

どのような巡り合わせか、焰が真実を知ったのは奥儀を継承して明けた翌日だった。

語り聞かせたのは絶命前の母親だった。赤髪紅眼の少年は、自分と父とがどれほど歪んだ存在なのかを知った。しかし本人にとつては大変な心的衝撃というわけでもなかった。

そんなことより目前に迫っている最愛の人の絶望的現実が、焰の全思考回路を凍結させ、心を“もぬけのから”にしてしまったのである。

彼の頭脳が情報を正常に処理するまでに、実に四年の歳月がかかった。引き換えに感情というものを失くしたが“そうするしかなかった”のだ。一人生き残った者の、それは運命さだめだったのだから。

両者の攻防は依然としてかたがつかない。

「息子の靈魂を捕虜にして何とする？性癖せいへきを満たすための玩具がんぐとして永久にもてあそぶつもりか！」

「お前こそ、実の父に何の恨みがある。恩義を忘れた浅ましき外道

が」

「なぜ“妻”を見殺しにした。賀茂にとどまらず己の一族をも焼き殺し、父上の魂はどこへ向かう」

「・・・その黒い心臓に死者をいつくしむ美しい血が通うのだとすれば、分け与えたのはこの俺が、それとも・・・？」

無双はほの暗い嘲笑を浮かべた。

「戯れるな！」

父のセンチメンタリズムをきっぱり拒絶して紅眼の息子は瞳に炎をちらつかせた。

「一族をかばう気はない。俺が聞きたいのはただ二つだ」

「言ってみろ」

「“日向なつめ”を愛していたのかということ」

“母上”と、もはや焰は呼ばない。それが彼女への愛でありせめてもの恩返しなのだ。

「そして、俺にたずさわったもう一人の女の正体だ」

「正体だと？」

無双は突然声をたてて笑いはじめた。

「一つ教えてやろう。私が手にかけた者どもの葬列にはおらぬ。逢いたいなら逢うことも可能だ。しかしそれまでに命がもたぬだろうな」

「もつさ」

焰を包む神通力の色が変わった。

「だからお前に逢いにきたんだ。この逢瀬は旅立ちの儀式だよ」

無双の黒曜石の両目が大きく見開かれた。互いに絡み合った二頭の白竜を外側からさらに黒い炎が取り巻いて空冥に滅したのだった。

「導光神を、いともたやすく・・・」

父親の表情は驚愕から歓喜の笑みへと変わっていった。

この何とも言い表しがたい病的な笑みを直視すると、理性と平静がにわかに消失していく息子だった。

「どこの世話好きか、親切にも親の愛情を“断ち切って”くれたらしい」

この笑顔を根深い心傷にしてはいけないんだ、と、焰は己に言い聞かせるのだった。純粹に信じてきたものは二セモノだった。父子も師弟も絆も何も、すべては道化芝居に過ぎなかった

「俺は魔界へ行く。父上が口を閉ざすならば自分で探すまでのこと」

事務的な乾燥をはりつけ、焰は言いはなった。無双は上気した顔を一瞬しかめた。

「無知なり。行くすべも“持たぬ”やつが」

焰はおもむろに首筋に手をやる。

「母上は臨終のきわまで愛した男の落胤が行かんとする道を案じてくださった」

“それ”を外すと、雷光の天空に悠然とかかげた。しなやかな指先で碧海へきかいの色をした水晶が揺れた。

途端に無双を包んでいた空気が変わった。

「・・・それは時空石ときせうせき」

声はさらに低く獣の息をしている。彫りの深い容貌に陰影が増し、鋭い三白眼に殺伐とした気迫が満ちている。

「須弥山すみざんの宝石がなぜなつめの手元にあった・・・」

「俺の道をひらくのは俺自身ということだ」

「ならばそれを止めるのが父親の所為というもの」

焰は父の行動に違和感を覚えた。その時黒髪の当主は上半身の衣をはぎ、胸部のやや左下に右手の二本指を添え、いつかどこかで聞いた覚えのある呪文を無表情な口調で唱えていた。

この呪文を知ったのはいつだったか・・・



記憶の大河にしばらく意識を放って焰ははつとした。  
門外不出のそれを口ずさめる者は限られているのに、彼はそれを  
異界の住人の口から聞いたのだった。

日向無双の体内で、解禁された人外の力が火を噴いていた。

淡く透明な夜空を背に、晩春の香りただよう今宵の水神池は浅い眠りに朦朧と浮かぶ水鏡である。

“魂の墓場”　そう呼ぶにふさわしい静寂が横たわり、生ある世界にあつてまったく異質な空間をつくりだしている。

ああ、目覚めることのなんと心地良いことが。

その男、は月を欠いた夜空をぼんやりと眺めながら、つかの間の解放感に酔いしれていた。

長い眠りに沈んでいる間、いくつもの短く切れ切れな夢が戯れては消え、また戯れては消えていった。しかし今宵は現実世界に戻り、生ある実感と大好きな酒の味を噛みしめることができる。その、なんと幸福なことが。

男が池の上を“歩く”と、水面は流動物であることを思い出したように波打った。雪のような肌に白の衣をまとった、男はまるで水面に浮かぶ一輪の蓮の花である。たつぷりとした銀髪が歩調にあわせて揺らぎ、真珠の微粒子が飛び散るように見える。

男は向こう岸に用があつた。

今やくたびれた石柱と化した友の魂の記念碑。そこに両手一杯の水とつまらない言葉をかけてやるのが、ここ数百年ですっかり定着した寝起き一番の行事になっていた。

「・・・玄翠<sup>げんすい</sup>、俺のやつてるこれは慈善活動か？」

「日向玄翠」の刻印を前に、男は皮肉をこめて笑んだ。切れ長の両目にアイス・ブルーの色調が冷やかだが、かすかな憂愁<sup>ゆうしゅう</sup>の陰りは哀惜の意か、それとも歳のせいだろうか。

「ああ、らしくないだろうな。お前の声が聞こえてきそうだよ。俺はただのしなびたジジイに成り果てた。かつての名が哀しいな・・・」

言葉を切ると、穏やかな眼差しは溜め息とともに天へと送られた。池を囲んで黒々と茂る梢はぽっかりと開け、はるか天宮の星達は静かに子守唄を歌っている。

「300年か。時は遠ざかることばかり続ける・・・」

池のほとりに腰を下ろすと、銀髪の男は巨大なひょうたん筒を片腕に抱え、鏡の水面を眺めた。釈迦が蓮池から下界の罪人を傍観するようである。映った氷細工さながらの美青年を、“彼”は眺めていた。

行くところが無ければ、すべきこともない。こんな月の出ない夜を何度くり返したことが。そろそろ死ぬことさえも忘却しつつある。

「神はなぜ、いまだに俺を生かしておく？生あるものに意味があるなら、あるいはこれは死であるのか？」

高尚な老詩人を気取ったつもりかそう吟じると、暗闇に浮かび上がる白い両脚をしなやかに組みかえた。

死ぬ気になればいつでも死ねた。死の動機には事欠くが、彼を恋慕う死神なら腐るほどいるのだ。

だが、まだ彼の親友はこの世を離れることができない。肉体こそ消滅したが魂が水神池を離れられない。日向玄翠に転生は未来永劫ありえない　そう思うと、気が付けば神経質に死神を全滅させ、ボーイスカウトまがいの墓守りを今日も演じてしまうのである。

男は小さく身震いをした。晩春の夜風が彼の背筋を撫でたのではない。“風神”の異称を持つ男を常にとりまいている妖気の風が、何らかの違和感を察知して主にそれを伝えたのだ。

いやに懐かしい匂いがする、と、風使いはぼやいた。

その時、彼のテリトリーに侵入者は無防備にも飛び込んできたのである。

「白夜様！」  
（ごやくさま）

頭上、から声が降ってきて、男は目を細めてそちらを見仰いだ。異形の生物が滑空してくる。その背に乗った女を見るなり、彼は頭痛をもよおした。

「別れた恋人をもてなす趣味はないんだが・・・」

「300年も経てばもう時効です」

夜露に濡れた草地に白い飛竜はふわりと舞い降り、主人が離れると、みるみるうちに無色透明に変わって溶けるように消えた。

銀髪の男に劣らず輝くような美女である。つやめく長い黒髪がたおやかに流れるが、両眼の紫色は彼女の性質を雄弁に語ってくれる。重量感のある十二単じふふにひもとえが女の美に拍車をかけるが、男にはその動きに

くさがいつもうざったくてたまらない。

辺りをただよう薄い霧に酒の匂いを感じて、藤の花の眼をした美女は顔をしかめた。

「禁酒していたはずでは？」

「酒の匂いを嗅いだけで貧血を起こす姫君が夜逃げしたもんでね」

それには触れず、美女は早口にまくしたてた。

「今夜が新月で良かったわ。白夜様、一刻も早く都へ向かってください」

「蛆虫うじむしどもの棲みかへ、俺に行けと？」

白夜、は腹を抱えて笑い出した。

「何の因果があつてあんな所へ出向かねばならんのだ。それに、長旅できるほど俺の気は長くないんでね。見ての通り、老体だし・・・」

己のみずみずしい肢体を彼は一瞥した。

「あなたの弟子が大変なのよ！！」

美女が金切り声を上げると、ようやく白夜の顔から笑みが消えた。

「・・・どういうことだ」

それには答えず、袖元から組み紐を通した碧<sup>あお</sup>の水晶を抜き取ると、女はそれを老齡の元恋人にしっかりと握らせた。

「行けば分かる」

「待て。俺はあそこは好かん」と

「あの子の力を解放したのはあなたでしょう！」

アイス・ブルーの瞳に電気が走った。

「バカ弟子が！“天”の力を使ったのか！」

「あなたにしか止められないわ」

「気短なクソガキめ。あれほど口酸っぱく言ったのに」

ひょうたんの酒筒を足元に叩きつけ、銀髪<sup>ぎんぱつ</sup>の師は手早く長髪を結び上げた。

「場所はどこだ」

「平清盛の御殿屋敷の近くよ」

師は一瞬啞然として手を止めた。

「派手にやってくれる」

「花子！」

美女は宙に和紙の札を放ち、先程の飛竜を再び召喚した。途端に彼女の横で一人ずつこけた。

「式神に変な名前を付けるのをやめんか！」

花子というには仰々しすぎる般若面はんにやじらの高等妖怪は、従順にも「グエ」と応答した。

(5)

5

「好き嫌いが激しい子だから、扱いには気をつけてね。特に言葉遣いが汚い人を嫌うから」

「おい、お前も来いよ」

「やーよ。命が大事ですもの」

あっさり断ると、美女は強引に白夜を引っ張りあげた。

「言ったでしょう？あなたにしか“あれら”の相手は無理よ。よしよし花子、ちゃんとお利口さんにしてるのよ」

だらしなく伸びた花子の鼻筋に本来の性別を疑わしく思っていると、美女のキスで欲望も満たされたのか、式神は俄然やる気で勢いよく地面を一蹴りした。

「おわっ」

無様にも振り落とされた銀髪のご長寿は、乗り物の片足にひっしとしがみついた。

「花子ー、危ない目にあつたらすぐに帰ってくるのよー」

遙か眼下で飼い主が無邪気に手を振っている。



「俺よりペットの心配か」

苦々しく舌打ちしつつ、なんとか背中に這いあがった白夜はふうと溜め息をついた。

「竜が竜の背中に乗るなんざ、こんなバカな話があるか、まったく・・・」

戦場に着くやいなや、白夜は元恋人が空飛ぶペットを従わせた訳を理解した。“平清盛の屋敷”を“渡り先”に指定した意味でもある。

天下の中枢を座標軸に都のうち半径数キロメートルは“守られて”いた。広大な結界をどこした主は、どうやら足元の屋敷が一番に保護したかったらしい。

しかし、ある地点を堺にその向こうはもはや別の惑星である。完膚なきほどの壊滅と、むきだしの大地を覆う分厚い噴煙。そして、長生きついでに世界をくまなく知りつくしているアイス・ブルーの瞳を氷結させたのは、噴煙の先に見える“絶景”の眺望だった。

黒、は分かった。それは数奇な星の下に生まれた弟子の、運命を焼き焦がす炎の色である。だが、“紫”が分からない。

白夜は3000年の生涯で対峙してきた神、妖魔、あらゆる情報を網羅した記憶の帳面をめくった。だが彼の虎の巻に紫の炎を妖気にまとう対象はただ一種であり、その種族は滅亡して時が経ちすぎている。情報の信用性なら太陽と月の秩序にも勝ると言い切れる。なぜなら、彼らの最期を看取ったのは白夜本人だからである。そして唯一の末裔<sup>まっえい</sup>も、このまま人界でひっそりと息絶やそうと思っている

る。

地平線上で激突する二色の火柱を愕然と目に焼きつけて、師の脳裏を後悔の文字がちらついた。

四年前、風呂敷にくるんだ里親の骨をかついで、まだあどけなさの残る赤毛の少年は水神池にやってきた。

「母方の実家を守る月城神社に遺骨を納めたい、その後は自分も池に身を沈めて命を終えたい」

そう、うわごとを言いながら月の無い夜空を眺めていたのである。

半ば好奇心、半ば使命感

銀髪の墓守<sup>はかもり</sup>はこの人界の一族との奇妙な縁に内心首をかしげつつ、旧友の子孫に異種の血流を共存させる道を開かせるべく、少年の心臓にからみついていた封印術を解除し、妖術のいろはを教えることを決意したのだった。

「黒い方の血は使うな」

魔物以上にやっかいな怪物を育てあげた、それは師の弟子に対する、ひいては人界に対する責任でもあった。いつか故郷の地を踏んだ時人生の選択肢が増えるように、と、躊躇<sup>ちゅうちゅう</sup>なく鍛えきわめさせた能力だった。白夜が本当に危惧しているのは、天界レベルの妖力と名門大家の神通力とが強力な二重奏を奏で、いつかは中途半端な肉体の器を破壊してしまうのではないか、ということであった。

とにかくにも、止めなければ

白夜の眼光は動揺を抑えたものに変わった。

止めなければ？

・・・どちらかが確実に死ぬのである。

「式神、お前は“あそこ”へ俺を降ろすだけでいい」

指し示された方向を凝視したまま、花子の武骨な胴体は金縛りにかかっていた。恐怖に心を折られたのである。

「・・・どうした、嫌か、花子」

「・・・」

「案ずるな。結界が無くともお前一匹くらい守れるさ」

花子の蒼白な顔に、まだいくばくかの迷いと、穏やかな安堵の色とが表れていた。しかし足止めの引力は相変わらずなようである。

「・・・褒美は何がいい」

突然、色男は甘いささやき声でくすぐった。

「お前の主人のことなら何でも知ってるぞ。この“時空石”を使えばあーんなシーンやこーんなシーンも見せてやるぞ」

「グ、グエ・・・」

陶醉した目つきをわずかに怒らせて、エロ式神は銀髪のパイロットをに

らんだ。この瞬間同性ならではの確信が芽生えたが、白夜は聞きたがめなかった。

扱いやすさに興じて、彼はさらにもう一息吹きかけておいた。

「彼女は本当に、“女”だぞ」

決定的だった。

名ばかりの雌飛竜は奮然と熱風の乱気流の中へ立ち向かった。

二体の恒星は衝突をくり返していた。爆発的な衝撃波が四方へ不規則にはしりくだる。怨念と狂喜がたがいに交錯し、大気を満たすのは壮絶な殺気である。

ついに視界全体を染めあげた、両者を取りまく妖気の“美しさ”に白夜は思わず放心した。乱舞するのは命を食いちらす死の光彩であるのに、空恐ろしいほどの妖艶な色調で見る者を魅了する。自然界にはけっして存在しない、神秘と精神のスターダストである。

このほの暗い光輝は三界に行きとどくだろうな

銀髪の長老は胸のうちに頭をかくと、頬がちりと“溶けた”のを合図に乗り物をはるか後方へ蹴りとばし 避難させ、単身、殺到する業火の花吹雪のなかへ身を投じた。

戦術の比率は両者、攻が200、防は無し、といったところだろう。だいたい戦術と呼ぶには頭が悪すぎる。銀髪の知将に言わせれば「エネルギーをただぶつけ合っているだけ」となる。しかし、両者のそれは量で圧倒的、質はまさに失神級といえる・・・

情動の温度が沸点に達して脳を動物返りさせたのか、それとも、わざとそうしているのか いずれにせよ部外漢には知るよしもない。

突如として出現した予期せぬ訪問者に、理性の廃人達は一瞬攻撃

の手をゆるめ、その妖しい紫の光明をちらりと見た。

しかし、緊迫した空気がやわらいだのは数秒にも満たなかった。互いを切り裂くような視線は再びまじわり、乱射撃の集中豪雨はたてつづけに疾走していく。

双方のゆがんだ精神内部を垣間見て、白夜の背筋を伝うものがあった。

「もはや魂を見失ったか」

答えぬ愛弟子の死滅した横顔は、なお美しい。

老年の心臓に、鉛を沈めた重々しさがある。

代償は大きそうだが、他に手段がない

白夜は目蓋の裏に結論を迷わせた。だが、時は秒殺されていく。のんきに老後の安泰などとふざけて、しょせん身のほど知らずの戯れ言だったのだ。この特異な一族と関わった時点で、否、そもそも天界の守護神として生を受けた時点で、隠居生活の極楽など、とうに葬式をあげたも同然だった。

一度でよいから、神からも死神からも放たれ、宇宙の緩やかな運行だけに呼吸をゆだねて、そうして生きてみたかったものだ

「俺は潔癖でな。愛する者の“墮落”していくさまを見るくらいなら  
」

“帰らぬ”弟子の横顔にむけて師は沈々と語りかける。

「天刑に平伏すほうがましだ」

次の半瞬、白銀の竜が天空を踊っていた。

長大であつた。

きらびやかな紫がかった白銀の鱗に、真珠の玉露がたわむれて輝く。すぐに天候が変貌し、突如として快晴の星空がひらけた。のしかかる暗黒の雲海と噴煙の幕は一掃され、無秩序に錯綜さくそうしていた気流は完全なる天竜の支配下に入ったのである。

下界の小空間で、理性への生還者がひとり棒立ちしていた。

「白・・・竜だと」

生涯二度目の神との遭遇は、黒髪の陰陽師に強烈な印象で迫つたようである。蒼白な顔色と血走る三白眼さんぱくがんが、彼の心境をしめしていた。

荘厳な怒号が地底までおののかせ、竜神は踊るように天空を一蹴りした。風の高波がまっさかさまに下界を目指す。軌道上の二人は左右に散つて全神経を回避の一点に集中する。その判断は正しい。大気の刃は地上に衝突し、円形に衝撃波が広がった。地表を燃やしていた二色の妖気は跡形もなくさらわれていた。

日向焰の黒竜鵬こくりゅうほうの力を完全に覚醒させないためには、一刻も早く本人を理性の主導下にもどす必要がある。“完全”とはつまり、神の遺伝子が人間のそれを食いつぶして宿主を竜体に变化させることだが、あくまで想定にすぎない。3000歳の老師でさえも、混血の行きつく先にどんな悪夢が待つのかは想像に難いのだ。

いずれにせよ、焰が黒い力を扱う条件は、均衡という名の命綱を本人がしっかりと握ることなのだ。師弟間ではそのような約束が厳重にかわされていた。にもかかわらず、彼は狂気えいきめの手中に堕ちた。平生の日向焰は感情麻痺の永久凍土えいきめうとつとをすみかにしている。おそらく、抑圧の力が長きにはたらいだ分、ぶり返しの反動は烈々（れつれつ）と本人に襲いかかったのだ。

頑強なる心の能面に亀裂が生じたということ、それはつまり、封じこめていた痛切なトラウマがいま再現されている証であり、彼の師は無言のうちに弟子の敵手を断定していた。

爆風にあおられた紅眼の少年は遙か後方の石林せきりんに墜落し、血を吐いた。全身から放射される黒い妖気がゆらりと弱まる。

すかさず放たれる第二波は、風速毎秒百メートルを超える竜巻である。紫色の螺旋線が円柱の表面を軸方向に奔走ほんそうし、自然界の法則はひどく歪められている。

竜巻は身体を起こしたばかりの少年を直撃した。たちどころに渦に飲まれ、上空へ巻きあげられる。すさまじい轟音の中で捕虜はなすすべもない人間の肉体である。恐怖に絶叫する他に許されるのは、いつさいの意識を遮断すること



天空へ送還された焰は、待ち構えていた白銀の胴体を前に力尽きていた。

後見人たる者のつとめだ。悪く思うな・・・

想念の音声は、伝達手段を異にする人間には届かない。もし受ける側に聴覚があれば、背景に不似合いな底無しのやさしさに満たされただろう。

ここまでは師の思惑通りだった。

回収した弟子を次の朝日が照らした時、彼は都から遠く離れた森林のふところに枕を高くしているのである。細かな後始末は藤の眼の女性に任せればよい。そしてこの“ツケ”は次の朔の晩にたつぷり払ってもらうことにして、老人のささやかな娯楽　酒興しゅこう　を妨害した不孝者を懲らしめてやるのだ・・・

そうばやいた天竜の角を迅風の刃が切りつけたのは、瞬間の出来事だった。

気流の渦から身を踊りだした少年の姿が予期していたそれと違うことに驚き、白夜に致命的な隙が生じてしまった。

極太の闇の奔流が一直線に天へ昇る。信じがたい速度であった。白竜の頭上にうねる“黒竜”日向焰が、神の作りあげたガーネットの水晶眼を鮮烈に輝かせていた・・・

下界に立ちつくす父親の心理は幻覚の花園にある。それは女神の

愛撫も匹敵できぬほどの絶頂だった。彼は時空をこえて17年前の感激と再び対面したのである。

もはや天空の劇場はほとんど余白を残さず二体の怪物に占拠されている。

悠悠と流れる黒竜鵬は、堂々たる漆黒の体軀たいくに金色の光と熱が行き来し、やや赤みをおびた鱗は艶つややかな光沢がみずみずしい。

立ちのぼる蒸気が黒竜の全身から虚空へと発散されていた。数時間にとわたる激戦で身体からしばらくとられた血液は相当な量に達しているはずである。精神崩壊のマリオネットは、もはや力の源泉を己の生命に求めている。

黒竜の頭上で、大気の温度は2000度に跳ねあがった。黄金の両角に灼熱地獄<sup>じやくじごく</sup>への道標があらわれる。気体が燃烧しているのではない。妖気の一部が登頂の極所で圧縮され、金色に発光しているのである。中心部はほとんど色が飛び、妖気の供給がさらにすすむと巨大な天体の爆弾が造形された。

バカが、人界をふつとばす気か！

暴走する圧倒的な自殺願望を、白竜は愕然と見あげた。相殺する攻撃をもつてのぞむのも可能だが、戦場は蜘蛛の糸のようにはかない世界である。迎撃するもしないも、このさい超新星爆発には変わらない。

故郷の戸籍をいっさい抹消し、義務も責務もすべてに背をむけて世界の秩序から身ひとつで逃亡した男が、最終的には損な性格にさいなまれ、みずからみじめな道を選択しようとしているのかもしれない。

いきなり、白竜は黒竜にからみついた。己を喪失した紅眼の死神は大气をゆるがす咆哮<sup>ほうこう</sup>をあげ、肉体戦を回避しようと激しく重量感ある身体を転じている。白竜は断固としてゆずらず、その場にしがみついている。黒い火花が白銀の絹肌を焼きこがして、悲痛な音が散った。

その時、天空に巨大な碧いオーロラが出現した。

光の幕は一对の神々を覆い、壮麗なるラピスラズリのシャワーが

全天にふりまかれた。

鮮血に染まった下界の石像は、心拍をひどく乱して神聖なエンドロールにはりつけられている。

そうして互いにもつれあいつつ、狂乱の怒号を鳴り響かせ、二頭の天竜は膨張しきった殺戮兵器とともに、この世界から途方もなく遠い場所へと消えていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4192e/>

---

クロムコア -三 千 世 界-

2010年10月11日13時54分発行